

インドネシアと

歴史を通じた連帯をしよう

えざきこうたろう
江崎光太郎
(しがく総合研究所)

天皇皇后両陛下下の

インドネシアご訪問

今年6月17日から23日にかけて、天皇陛下と皇后両陛下はインドネシアに親善訪問をされました。訪問後、天皇陛下はこのようなコメントを発表されました。「若い世代の人々が、お互いの国に対する関心を深め、両国の相互理解と友好協力の一層の深まりに大きな役割

を果たしていつてくれることを期待いたします。(一部抜粋)」

若い世代による交流とインドネシアとの関係深化を期待されていることを感じるお言葉である。実際に、インドネシアの国際社会における重要性は年々増している。今回は、そのインドネシアの重要性と、両国の歴史の歩みを振り返りたい。

インドネシアの重要性

インドネシアは死活的に重要なシーレーンのど真ん中に位置し、マラッカ海峡他、多くのチョークポイントも抱えている。さらにアジア圏内で、GDP第5位に位置している。人口動態を鑑みても、生産人口が多く、益々存在感を増すことは確実だ。

また自由主義の観点からも大きな役割を果たした国である。1960年代、東西冷戦の最盛期において、アジアもまた共産主義思想が広がっており、1965年9月30日にはインドネシアで共産主義者によるクーデターが発生した。幸い反共陸軍を中心に、懸命に抵抗し、共産化を免れることが出来た。仮にインドネシアが共産化していれば、ドミノ倒しのようにアジア各国にも共産主義が普及し、

今の状況とは全く異なる様相になっていたはずだ。

このインド太平洋の結節点にあるインドネシアが安定すること、そしてそこと友好関係を築くことは、日本のシーレーンの自由で安全な航行のために重要なのだ。要はインドネシアとの共闘関係を築くことが大事なわけだが、過去にも日本はインドネシアと共闘した歴史がある。今回は改めて、その歴史を振り返りたい。

長きにわたるオランダ支配

かつてインドネシアは、300年近くにわたりオランダの支配下にあった。徹底した愚民化政策が行われ、標準語であるインドネシア語の普及さえ阻止され、過酷な搾取のために餓死者が続出、平均寿命は35歳にまで低下

したと言われる。

日本によるインドネシア統治の光と影

そうした状況を大きく変えたのが、大東亜戦争だ。1942年3月、日本軍は僅か9日間の戦闘でジャワ島の連合国軍を降伏させ、オランダ植民地支配の軛を破った。以後、日本統治になり、次のような施策を行う中で、独立の体制が進められていくことになる。

1つ目は、インドネシア語を公用語にしたことだ。これまでオランダによる分割統治をされていた民族が、インドネシア国民として共通意識を持てるようになった。

2点目は軍隊の創設・育成だ。のちのオランダとの独立戦争の主力部隊となったPETA（インドネシア郷土防衛義勇軍）を設けて訓練した。「サンパイマティ（死ぬまでやる）」

された。戦時下という背景もあり、食糧も十分ではなく、地域によっては飢餓状態も発生したと言われている。現在でも、ロームシヤグという単語が残るほどに、民衆に強力な印象を与えた。

ジャカルタにある旧前田邸という海軍将校の家であった場所には、スカルノ大統領が起草した独立宣言文が飾られており、その独立宣言文の日付には、05年8月17日と記されている。05年とは皇紀2605年、日本の暦を指している。スカルノ大統領がインドネシア独立を支援した日本に感謝するために皇紀を使用したという説もある。約3年間にわたるインドネシア統治によって、多くの人々が苦しんだ事実がある一方で、日本がインドネシア独立の一翼を担ったこともまた事実なのだ。

を合言葉に、相撲を徹底的に取った。何よりも大事なことは、300年にもわたる支配で植え付けられた、自分たちは白人に勝てないとするセルフイメージを打破することだった。筆者も、PETA出身者に話を聞かせていただいたことがあるが、「何よりも敢闘精神を涵養してくれたのが有難かった」とコメントしていたことが印象的であった。

3点目は国家運営のための人材育成だ。インドネシア人の大学・専門学校卒業生は数百人に過ぎなかったため、海員養成所や工業学校などを新設・拡充し、10万人に及ぶ青年エリートを養成し、のちに彼らが中心となり、インドネシア国家の運営を担うことになった。一方で、日本によるインドネシア統治は暗い影も落とした。飛行場や鉄道、道路、炭鉱などの労働に、多くのインドネシア人が徴用

インドネシアと歴史を通じた連帯を図ろう

市ヶ谷の防衛省の一角に、スデイルマン將軍の銅像が設置されている。スデイルマン將軍とは、PETA出身でインドネシア独立の英雄と崇められている人物だ。2011年に寄贈されたこの像は、「アジアの安定に向けて、我々と共に立ち上がるのではないか」とするメッセージとも言われている。以来、民間団体が主催で毎年8月17日には市ヶ谷防衛省で、スデイルマン將軍献花式が執り行われており、インドネシアと歴史を通じた交流が行われている。

かつて、アジアの安定のために、共闘した日本とインドネシア。国際情勢が緊迫化している今こそ、かつての歴史を踏まえることで、より強固な関係を築きたいものだ。

